法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-05-26

対人関係の基盤となるソーシャルスキルの認知及び表現の発達的解明と教育的支援

渡邊, 弥生 / WATANABE, Yayoi

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
科学研究費助成事業 研究成果報告書
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
6
(発行年 / Year)
2011-05

Hosei University Repository

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２３年　５　月　１２　日現在

機関番号：32675
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2010
課題番号：20530608
研究課題名（和文）対人関係の基盤となるソーシャルスキルの認知及び表現の発達的解明と教育的支援
研究課題名（英文）Development and Education of Cognitive and Expressive Aspects of Social Skills as a Basis for Internal Relations.
研究代表者
渡邊　弥生（WATANABE YAYOI）
法政大学・文学部・教授
研究者番号：00210956

研究成果の概要（和文）：本研究では、ソーシャルスキル教育の実践において、感情に焦点を当てた実践を行うとともに、ソーシャルスキルだけでなく、自尊心やレジリエンスなどの変数にどのような効果があるかを検討した。その結果、自尊心やレジリエンスに効果があることが明らかとなった。また、セッション後の般化についてどのような方略が効果において優れているかを明らかにするため行動促進方略とメタ認知方略とを比較検討したところ、メタ認知方略の効果が認められた。さらに、思いやりを育てるプログラムにおいて重要視されてきた絵本の読み聞かせについてのストラテジーを検討したところ、抑揚、速さ、ポーズの取り方といった要因が聞き手による「上手さ」の評価、ひいては物語への共感と関連する可能性が示された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study is to examine the effects of sessions dealing with emotion as a target skill on social skills, self-esteem, and resilience in students. Results showed that social skills education focusing on emotion is effective on self-esteem and resilience. Moreover, this investigation focuses on comparing the effect of Behavioral rehearsal and Self-monitoring techniques for promoting generalization and maintenance of social skills for students. Results suggested that the Self-monitoring technique encouraged higher meta-cognitive ability in the students. Furthermore, effective strategies for book-reading to children, as important aspects of the social skills program was investigated. Results suggested that factors such as intonation, speaking rate, and placement of pauses may be related to how highly listeners rated the story-reading, and ultimately to the degree of empathy listeners feel for the story.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	2,000,000	600,000	2,600,000
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：発達臨床心理学、学校カウンセリング
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：ソーシャルスキル、対人関係、思いやり、いじめ、児童・生徒、発達、読み聞かせ

１．研究開始当初の背景
いじめの予防や、思いやりを育てるために

ソーシャルスキル教育が学校現場にも導入されるようになったが、実際の効果に関する

Hosei University Repository

エビデンスが不足していた。具体的には、そのプログラムに含まれているさまざまなストラテジーのどの部分がどのような結果を生み出すのかという点については実証されていない状況であった。また、ソーシャルスキル教育の実践においては、認知行動的な理論を背景に実施されていたが、感情に焦点を当てた実践がなされていなかった。

２．研究の目的

基礎的研究と実験的研究に分けて、分担者との協力によって検討をはじめた。基礎的研究では、思いやりのプログラムにおける、絵本の読み聞かせのストラテジーにおいて、どのようなことに配慮すればよいかを明らかにするために、読み聞かせのしかたについて検討を開始した。最初は、読み手側からの読み聞かせの配慮について検討し、つぎに、聞き手からの読み聞かせの上手さについて検討した。

他方、実験的研究では、これまでのプログラムに感情に焦点を当てたセッションを加え、その効果を明らかにすることとした。方法論的にも、どのようなアプローチが効果を明らかにするかについて、モデリングや教示の与え方など介入の方法と効果との結びつきに焦点を当て、スクールワイドな実践を複数の県で実施した。

３．研究の方法

＜基礎的研究＞

(1)平成20年度から21年度にかけては、言語表現の認知及び表現に関するソーシャルスキルの研究：思いやりを育てるプログラムにおいては、絵本の読み聞かせが重視されてきた。特に、教材として用いられている絵本の読み聞かせを通して、登場人物の気持ちを読み手である子どもたちに伝え、子どもたちの共感性を喚起することが重要である。本研究では、どのような読み聞かせの表現が受け手の物語への共感性を高めるかについて検討した。絵本を聞かせる対象として、幼児対象、児童対象、生徒対象、成人対象という４つの状況をイメージさせ、６人の成人（女性）を調査協力者として、読み聞かせ行動を依頼した。6名のうち3名は実際に子どもをもつ母親であり、残り3名は子どもをもたない女性であった。各読み手に対して5歳から成人までの年齢を想定して4回の絵本の読み聞かせを実施し、その音声を録音し、抑揚、速さ、ポーズの取り方といった音声学的特徴を分析した。

平成22年度には、聞き手からの読み聞かせの上手さについて検討した。すでに録音した6名の話し手の読み聞かせ材料を、大学生22名に聞かせ、「上手だった」「引き込まれた」「5歳(15歳)の子どもにふさわしい読み聞かせ方だった」などの項目について評価を依頼した。

＜実験的研究＞

(1)感情に焦点を当てたソーシャルスキル教育：従来のＳＳＴに、アンガーマネジメントなどの感情面の制御してきたS.S.GRINの方法をベースに、日本になじむいじめ予防教育として新しいバージョンのＳＳＥを展開した。

特に、「感情」をメタ認知し、それをコントロールできる力を育てるために、モノローグ型のモデリングをプログラムに導入したうえ、「自尊心」「敬意」などの感情をセッションのターゲットスキルとして導入した。

アセスメントは、ソーシャルスキルだけではなく、自尊心、レジリエンス、時間的展望などについても測定することとした。また、プログラムを実施しない学校と実施した学校との比較や、セッション全体の効果だけではなく、ターゲットスキル別の効果を明らかにした。さらには、セッション後の般化に必要な方法を明らかにするために、行動リハーサル条件とメタ認知条件のセッションを設定し、比較検討した。

① 中学校、高校でのセッション例は、下記が典型的な内容であった。

セッション１：ガイダンス・自己紹介のスキル
セッション２：話すスキル
セッション３：聴くスキル
セッション４：あたたかい言葉かけ
セッション５：感情のコントロールⅠ
セッション６：感情のコントロールⅡ・まとめ

評価方法

① 学生用社会的スキル尺度（嶋田,1998）を用い、下位尺度は「引っ込み思案」「向社会性」「攻撃性」であった。

② 学生用自尊感情尺度（渡辺・山本,2003）を用い、下位尺度は「評価過敏」「自己価値」「対人不安」「劣等感」であった。

③ 中学生用レジリエンス尺度（石毛・無藤,2005）を用い、下位尺度は「自己志向性」「関係志向性」「楽観性」であった。事前テストは 2008 年 6 月、事後テストはセッションがすべて終了した 2009 年 2 月に行った。

高校生を対象にした般化についての比較については下記のような対象、測度、手続きで実施した。

対象者：高等学校 1 学年の生徒 133 名（男性：66 名，女性：67 名）。A

測定尺度：① 中学生用社会的スキル尺度(嶋田，1998)。② 標的スキルにかんする尺度（DeRosier，2002，渡辺・星，2009)。SSE

Hosei University Repository

における標的スキルを“普段，どのくらい使用しているか？”について，“まったく使用しない”から“とても使用する”の 100㎜の水平の直線に対し，当てはまると思われる部分の直線上に垂直線（斜線）を引くことを求めた。測定は 4 時点で回答を求めた。

アセスメントは自己評定と教師評定によって実施した。般化維持方略の実施内容は、各学級を対象とし，教育的な配慮から統制学級を設定せずに，般化維持方略の実施内容と標的スキルを学級ごとに変え，介入はホームルーム（以下，HR と表記）と総合的な学習の時間に 1 回あたり 20 分程度であった。般化維持方略の内容を以下に示した。

① 行動リハーサル促進方略：標的スキルのポイントが書かれたポスターを教室内に掲示し，1 週間のうちに重点的に意識して練習するスキルを決めて，HR や授業などでスキルの使用を奨励した。また HR の時間にワークシートを配布し，SSE の授業と同様の形式でスキルの練習ができるように設定した。フィードバックは，教員からのワークシートへのコメント記入による言語的・社会的賞賛が主であった。生徒は日常生活を行う教室でいつでも標的スキルを確認することができ，また教師が指導を行う際に生徒に明確な行動を提示し，生徒と教師でスキルについての情報を共有し，行動を繰り返し練習できるように配慮した。

② メタ認知促進方略：標的スキルのポイントが書かれたポスターを教室内に掲示し，1 週間のうちに重点的に意識して練習するスキルを決めて，HR や授業などでスキルの使用を奨励した。また HR の時間にワークシートを配布し，「標的スキルを練習することができたか」，「どのような場面で標的スキルを使うことが大切か」，「標的スキルを使うことは何の役に立つのか」といった内容の質問に回答することで，生徒のメタ認知を促進できるように配慮した。

４．研究成果

＜基礎的研究＞一般に、子どもの理解を深め登場人物の視点に共感できるように物語を読み聞かせる方法は、経験則に頼っていることがほとんどであった。子どもにわかりやすいように、ゆっくり読むとか、大人に対するよりも感情を移入するなどのことが知られている。実際、6 人の成人(女性)の読み聞かせを比較した結果、生徒⇒児童⇒幼児という順に、絵本を読み上げる速度が遅くなり、ポーズの長さとおよび頻度が増大し、声の抑揚の幅（ピッチレンジ）が拡大することが示され、年齢が若いほどゆっくりと、感情を込めて読み聞かせを行うことが明らかとなった。

つぎに、聞き手側からの調査を実施し、先の 6 名の録音に対する評価を行ったところ、5 歳向けの読み聞かせの方が 15 歳向けの場合よりも、全体的に上手に聞こえ、聞き手を引き込む効果があることが示された。

また、子どもを持つ母親の方が、子どもを持たない女性に比べて、5 歳向けの読み聞かせが特に上手に聞こえたことが見出された。さらに、このような評価が抑揚の大きさや話す速度に対する聞き手の印象と関連していることが示唆された。したがって、教材を与える時の読み聞かせについて、聞き手側を物語に共感させるような読み聞かせの方法を明確にする必要性が示唆された。

＜実験的研究＞

平成 20 年度は、千葉県と静岡県で行った。

１）千葉県の高等学校３１名をＳＳＥクラスとそうでないクラスに分けて比較した。８つのターゲットスキルに基づくセッションを構成し、結果を比較したところ、実践後にソーシャルスキルの得点が向上した。

２）静岡県の高等学校全学校１９６名を対象に実施したところ、介入しなければ獲得したスキルが低下する傾向にあるが介入することによって、ソーシャルスキルを維持できることが明らかになった。

３）静岡県の中学校全校生徒 563 名を対象に計 6 回の授業を実施した。トレーニングを行わなかった中学校生徒 743 名と比較したところ、レジリエンスにおける「関係志向性」、自尊感情における「対人不安」と「劣等感」において有意な差が見られ、トレーニングによってこうした点について向上（もしくは改善）がみられたことが確認された。

平成 21 年度は、静岡県での中学校全体でのプログラムを維持し、介入すればソーシャルスキルが維持できるが、介入をやめると維持が難しくなることが明らかとなった。また、長野県の高等学校 1 年生を対象に、さらに動機づけを重要な変数と考えて、時間的展望についても配慮しながらプログラムを作成した。実践後も般化の方法を複数準備し、介入後どのようなサポートが効果を維持するかについて検討を開始した。

平成 22 年度においては、中学校全体でプログラムを実施する学校と実施しない学校でプログラムの効果が比較検討された。その結果。中学校においては実施した学校では、中学生用自尊感情尺度では、「対人不安」と「劣等感」において交互作用が示され、プログラム実施校で改善傾向が認められた。さらに、中学生用レジエンス尺度においては、「関係志向性」においてプログラム実施校で改善されたことが明らかになった。

他方、高等学校では，般化の効果を検討するために２つの方略、すなわち、行動促進方略とメタ認知促進方略が比較検討された、そ

Hosei University Repository

の結果、生徒評定においてはメタ認知促進方略が「話すスキル」の反応維持と「自分を大切にするスキル」の反応般化を促進することが明らかになった。また，教師評定においても，メタ認知促進方略が社会的スキル得点の維持に効果があることが明らかになった。したがって、セルフモニタリングを通してメタ認知能力を高めることで SSE の効果が促進されることが明らかになった。ただし，トレーニング後の効果の減衰と，教師評定の妥当性，さらには効果検証の手続きについての問題は残された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

(1)八木隆生　2010 発達障害を持つ子どもへの VLF プログラムの適用に関する研究，静岡大学教育実践総合センター紀要, 18, 121-128. 査読有

(2) 小林朋子・渡邊弥生　2010 中学生を対象とした感情面に焦点をあてたソーシャルスキル・トレーニング（S.S.GRIN-A）の実践, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 18, 113-120. 査読有

(3)渡邊辺弥生　2010 話下手な子どもの自己表現を支援する－聞き上手を育て、話下手をなくそう, 教育と医学, 682, 4-11. 査読無

(4)渡邊弥生（原田恵理子と共同）　2010 攻撃行動が高い男子高校生に対する支援－ソーシャルスキルトレーニングとコンサルテーションを中心に　カウンセリング研究, 42, 301-311. 査読有

(5)小林朋子　2010 中学生を対象とした感情に焦点をあてたソーシャルスキル・トレーニング（S.S.GRIN-A）の実践, 静岡大学教育学部教育実践総合センター紀要, 第 18 号, 113-120. 査読有

(6)田嶋圭一　2010　依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響, 法政大学文学部紀要 60, 147-158 査読有

(7)渡邊弥生　2009 中学生対象のソーシャルスキルトレーニングにおけるセルフマネジメント方略の般化促進効果, 5 法政大学文学部紀要 9, 35-49. 査読有

(8)渡邊弥生　2009 気持ちを上手に表現するために―ソーシャルスキル教育から　児童心理, 5, 50-54. 査読無

(9)渡邊弥生　2009 日本になじむ、青年期対象いじめ予防プログラムとは　法政心理学会年報，　3(1), 11-14. 査読無

(10)山田汐莉・渡邊弥生　2008 幼児のレジリエンスと対人葛藤場面における対処方略、および母親の介入行動との関連性に関する研究、乳幼児教育学研究、17, 105-116. 査読有

(11)谷村圭介・渡邊弥生　2008 大学生におけるソーシャルスキルの自己認知と初対面場面での対人行動との関係　教育心理学研究, 56(3), 364-375. 査読有

〔学会発表〕（計 22 件）

(1)渡邊弥生　The effects of school-wide social skills intervention on high school studentsThe 40th congress of European Association for Behavioral & Cognitive Therapies. 2010 年 10 月 10 日,Milan, Italy.

(2)Sonu,M.,Tajima,K.,Kato,H.and Sagisaka,Y. The effect of word embedded in a sentence and speaking rate variation on the perceptual training of geminate and singleton consonant distinction. InterSpeech 2010 年 9 月 29 日,Chiba, Japan

(3)渡邊弥生　日本になじむ予防教育の導入－学校のホンネ－　日本教育心理学会第 52 回総会発表論文集　2010 年 8 月 27 日　早稲田大学

(4)原田恵理子　感情のアプローチを含むソーシャルスキルトレーニング効果の検討その３　日本教育心理学会第 52 回総会発表論文集　2010 年 8 月 27 日　早稲田大学

(5)星雄一郎　標的スキルに対するソーシャルスキル教育の介入効果の検討　日本教育心理学会第 52 回総会発表論文集　2010 年 8 月 27 日　早稲田大学

(6)渡邊弥生　「日本」になじむ、いじめ予防プログラム（２）－生徒、教師、大学生、研究者の連携－,日本教育心理学会第 51 回総会自主シンポジウム,2009 年 9 月 21 日　静岡大学

(7)小林朋子　感情に焦点を当てたソーシャルスキル・トレーニングに関する研究（１）－中学校全クラスにおけるソーシャルスキルトレーニングの効果について，日本教育心

Hosei University Repository

理学会第 51 回総会自主シンポジウム,2009 年 9 月 21 日　静岡大学

(8)太田賀子　感情に焦点を当てたソーシャルスキル・トレーニングに関する研究（２）ーティーチングアシスタントによる授業とビデオ教材による授業の比較についてー, 日本教育心理学会第 51 回総会自主シンポジウム,2009 年 9 月 21 日　静岡大学

(9)原田恵理子　感情のアプローチを含むソーシャルスキルトレーニングの効果の検討その２　日本教育心理学会第 51 回総会自主シンポジウム,2009 年 9 月 21 日　静岡大学

(10)星雄一郎　高等学校全体へのソーシャルスキル教育の介入について,日本教育心理学会第 51 回総会自主シンポジウム,2009 年 9 月 21 日　静岡大学

(11)山田汐莉　高校生の知覚に関するソーシャルサポートと漢族度、およびサポート源がレジリエンシーに及ぼす影響,日本教育心理学会第 51 回総会自主シンポジウム,2009 年 9 月 21 日　静岡大学

(12)宮本孝子　児童のコーピングに影響を与える社会化要因の検討,日本教育心理学会第 51 回総会自主シンポジウム,2009 年 9 月 21 日　静岡大学

(13)Watanabe, Y.　Social skills education aiming at change of cognition of self-esteem, Society for Applied Research in Memory and Cognition, July, 28, 2009, Kyoto. 平安会館

(14)Watanabe, Y.　Assessing the effects of generalization strategy of class-wide social skill training on junior high school students. Society for Applied Research in Memory and Cognition, July, 28, 2009, Kyoto. 平安会館

(15)Kobayashi, T &Watanabe, Y.　The practice of social skills training in a Japanese junior high school. Association for Moral Education 35th Annual Conference. Utrecht University, July, 2, 2009, The Netherlands.

(16)Watanabe, Y,, Kobayashi, T.,& Hoshi, Y. The effectiveness of social skills education focusing on high school students, Association for Moral Education 35th Annual Conference, July, 2, 2009. Utrecht University, The Netherlands.

(17)渡邊弥生　Social skills training focusing on understanding emotions for high school students. Association for MoralEducation,November,15,2008.University of Notredom, U.S.A.

(18)渡邊弥生（原田恵理子ら５名と共同）感情のアプローチを含むソーシャルスキルトレーニングの効果の検討　日本教育心理学会第 50 回総会　2008 年 10 月 13 日　東京学芸大学

(19)渡邊弥生　日本になじむ、いじめ予防プログラムとは―「感情」へのアプローチ　日本教育心理学会第 50 回総会　2008 年 10 月 13 日　東京学芸大学

(20)渡邊弥生（谷村圭介と共同）　大学生におけるソーシャルスキルの認知と初対面場面での対人行動との関係、 日本教育心理学会第 50 回総会, 2008 年 10 月 13 日　東京学芸大学

(21)渡邊弥生(大重啓と共同)　親の養育態度が子どもの友人関係および学校適応感に及ぼす影響　日本教育心理学会第 50 回総会, 2008 年 10 月 13 日　東京学芸大学

(22)渡邊弥生　児童の対人葛藤場面における対人交渉方略の発達　日本心理学会第 72 回大会, 2008 年 9 月 21 日　北海道大学

〔図書〕(計 7 件)

(1)渡邊弥生　2011 子どもの「10 歳の壁」とは何か？　光文社 1-261.

(2)渡邊弥生　2011 絵本で育てる思いやり 野間教育研究所紀要　第 49 巻, 1-250.

(3)渡邊弥生・川島一夫編著　2010 図で理解する発達－新しい発達心理学への招待 1-219.

(4)渡邊弥生編　2009 絵本で育てるソーシャルスキル 明治図書 1-146.

(5)渡邊弥生・小林朋子編著　2009 10 代を育てるソーシャルスキル教育　北樹出版 1-160.

(6)渡邊弥生・伊藤順子・杉村伸一郎編著 2008 原著で学ぶ社会性の発達　ナカニシヤ出版　1-207.

(7)渡邊弥生　2008　11 歳の身の上相談 講談社　1-98.

Hosei University Repository

〔その他〕
ホームページ等
http://sites.google.com.site/emywata/

６．研究組織
(1)研究代表者
渡邊　弥生（WATANABE YAYOI）
法政大学・文学部・教授
研究者番号：00210956

(2)研究分担者
田嶋　圭一（TAJIMA KEIICHI）
法政大学・文学部・准教授
研究者番号：70366821

小林　朋子（KOBAYASHI TOMOKO）
静岡大学・教育学部・准教授
研究者番号：90337733